

矢板が主んだ偉人②

今回は、「馬術の神様」と称えられた印南清（一八九六〜一九八八）を紹介しましょう。数ある教え子の中には、あの大文豪の三島由紀夫がいました。その三島が最も敬愛したのが、この印南でした。



印南は、明治二十九年に矢板市平野で生まれ、十八歳で陸軍士官学校に入學すると、士官候補生として近衛騎兵隊に配属されました。ここで、今村少尉と出会い、馬に対する目が開かれ、以来九十二歳で亡くなるまで馬に係る生涯を送りました。その中で最も栄光に輝いたのは、大正十三年、印南が二十八歳のとき、昭和天皇のご成婚の際に、その行列の供奉司令を務めたことでした。

また、昭和七年のロサンゼルスオリンピックでは、選手として選抜されたものの、愛馬「青葉亭」が体調を崩して出場を断念するというハプニングに見舞われてしまいました。

第二次世界大戦の際に

は、関東軍師団参謀長に任官し、満州で終戦を迎えシベリアに抑留されます。この際に、印南の手柄を表す事件が起きます。それは、ソ連軍から三百六十七名の使役を出せと命ぜられたにも関わらず、病人などをいたわって二百六十名しか出さなかったのです。そのため一労働者におとされ、材木運びをさせられた上に帰国も最終の昭和二十四年十二月まで留められたのでした。部下思いの半面硬骨な武士然とした面を持ち合わせていたようです。そして十二月一日、四年半ぶりに日本の土を踏むことができました。

帰国後は、恩師であり先輩でもある城戸俊三氏の招きにより、馬事公苑に勤めることになり、ここで教官として後進の育成に尽力しました。その中の一人が三島由紀夫でした。三島は、印南が馬術の指南書である「馬術読本」を出版すると聞くと、その装丁と序文を買って出ます。その序文の中で、「この七十四歳（当時）の旧帝国陸軍騎兵大佐は、今も欠かさず一回七時間馬上におられるのである。」と賛辞を送っています。しかしその三島は、昭和四十五年十一月二十五日に市ヶ谷駐屯地で自殺してしまい、この本を目にすることはありませんでした。結局、その序文が三島の絶筆となってしまうのでした。



(T・S)

●始めたきっかけは
小学一年生の時に父が監督している野球部に入部しましたが、その後すぐに母がコーチをしていたソフトボールに興味を持ち、始めました。片岡中学校時代には、県大会に出たことはなかったのですが、姉が通っていた埼玉栄高校の監督から声をかけていただき、インターハイ、国体などに出場することができました。また、主将の責任も学ぶことができました。

●魅力は
一球のボールをメンバー全員で追いかけて、一喜一憂できることです。また、自分の活躍で良い結果が出るとチームのみんなが喜んでくれることに幸せを感じ、現在まで続けることができました。

●練習は

守備練習では、ひたすらノックを受けています。バットインクも打ち込みを繰り返して、身体が覚えるまで続け、自分の形を作っています。また、チーム練習では、実践に近いケースを想定し練習しています。

●国際大会の感想は
昨年十月に中国で開催された第二回アジア女子ソフトボール選手権大会に参加しました。大会では、日本を含めた八カ国で戦いました。結果は、優勝は中国、準優勝は台北、日本は三位でした。監督は、いつも生活のオン・オフを示してくれる方で「何ごとでもチャレンジ精神を持って恐がらずに楽しむことが一番」と言ってくれたため、思いっきりプレーすることができました。おかげで大会では「ベストバッター賞」に選ばれました。



(M・W)

矢板から世界へ！

ソフトボール
築瀬裕花さん

●つらかったことやうれしかったことは
チーム内で意見が分かれ、一カ月練習にならなかったことです。メンバーで何度もミーティングを行い、ひたすら自分たちで考え、答えが出た時はとてもうれしかったです。そして、コミュニケーションの大切さを実感しました。

(編集後記) 八月はお盆の月、里帰りする家族や友人に「やいた応援かわら版」を読んでもらっては？記事を読んで初めて知った身近な矢板のこと、離れて気付いたことや記事への感想などをお知らせ下さい。お待ちしております。(M・K)